

人間はなぜ、スポーツをするのか (1/2)

——直立二足歩行は人体に何をもたらしたのか——

内 海 和 雄*

1. 課題設定

以下のような課題設定から、「人間はなぜ、スポーツをするのか」として、「直立二足歩行は人体に何をもたらしたのか」、「スポーツとは何か」の2部構成で検討する。

1.1 スポーツ研究にとっての基本

事象の構造を内的要因と外的要因の関係の中で把握（構造的把握）し、その事象の誕生と進展の歴史的展開（歴史的把握）の統一的把握は研究方法論の基本である。

1.2 現在の諸問題からの必要性

1.2.1 スポーツの公共性

新自由主義は、国防と警察業務以外はすべて民営化、市場化をして、自由経済を進めようという「夜警国家論」である。福祉は経済の発展を阻害し、国民を怠惰にさせるとして福祉の悉くを民営化、市場化しようとする。一方、大企業が栄えることによりその利潤が国民にもお零れが滴り落ちる（トリクルダウンする）ので国民も潤うという。こうして世界中の国々で福祉政策が削減され、国民間の貧富の格差が拡大した。国際的に見れば先進国の大企業とその経営者のごく一部が巨万の富を独占した。その一方で、国家間の貧富の格差が拡大し、貧困国は多国籍企業と先進諸国に厳しく収奪されて一層貧困化した。これまでの中産階級の多くが低階層

化を余儀なくされ、女性差別も進んだ。国民の圧倒的な多数は労働条件を悪化させ、給与を減らし、福祉の低下と貧困化に喘いでいる。

戦後の福祉政策によって少しずつ進んできた公共スポーツ政策も削減され、私事化されている。日本でも、世界でも同様である。いま、スポーツの公共性の根底を突き詰めると、それはスポーツの人類史的起源、スポーツの本質に遡って考察する必要性に行き着く。

1.2.2 東京オリンピック批判

1980年代以降のオリンピックの商業化はIOCの財政を潤し、そのオリンピック・ムーブメントを通して、世界のスポーツ振興に大きな貢献をして来た。その一方で多くの課題を抱えるようになった。それに伴ってオリンピック批判も増えてきた。私は2012年ロンドン大会までの批判については既に概観した¹⁾。

2020東京大会はCOVID-19の影響で前例の無い1年間延長策が採られた。それでもコロナ禍は収束せず国民の80%近くが反対する中で、2021年の炎天下とコロナ禍に強行開催された。オリンピックの莫大な放送権料とキャンセル料の負担争いは必至だった。当然、こうした政策は多く批判された。それは大きく2つの傾向を持った。1つは、憲章の精神に立ち返って、選手ファースト、真の国際平和運動を再建せよというものである。この根底には人間にとってスポーツ、スポーツ競技会は必須の文化であり、IOCの平和的な発展を希求するという立場である。一方、オリンピックは莫大な公共予算を大企業の設けのために消費し、会場周辺住民の

* 広島経済大学名誉教授

諸権利を蹂躪し、もはや国民生活を抑圧するものでしかないから東京大会のみならず、オリンピック自体に反対という、オリンピック否定論である。ただし、この論者にはスポーツとは何か、競技会とは何か、オリンピックが目指してきた平和への貢献などの考察は一切無く、とにかく現状の否定からオリンピックの全面を否定する。同じ論理が敷衍されれば、サッカーや陸上競技、水泳などの国際スポーツ競技会も否定される。こうした状況は今一度スポーツとは何か、スポーツ競技会はなぜ必要なのかという根本を問うところから説き起こす必要がある。

1.2.3 e-sport はスポーツか

スポーツの競争性を内容とするコンピュータゲーム（多くはスポーツよりもバトルである）に e-sport がある。大会賞金が1億円を超えるものもある。自治体の中には高齢者の認知症防止策の1つとして推奨するところもある。その賞金の高さ、人気の高さゆえにスポーツ領域に取り込もうという動きもある。e-sport のスポーツとしての推進論者には「筋肉を使用している」と正当化する人もいるが、同様な論理でゆけば囲碁、将棋、チェス、トランプなどの競争性を享受する非身体的競争ゲームもスポーツとなる。そこでは小筋群を使用するからである。ホイジンガの時代（1900年代初頭）にも、「すべての知能の遊びを、チェスにしる、トランプにしる、スポーツに含めせてしまうようになった。」²⁾ という過去がある。

e-sport は小筋群特に手の指の激しい運動の反復であるが、長時間それに没頭すれば大筋群の運動不足に陥り、スポーツ団体が推奨する運動促進と矛盾する。ここでも再度根本に遡ってスポーツとは何か、人間はなぜスポーツをするのかを問う必要がある。特に子どもたちのスポーツ離れ、テレビゲームへの没頭による運動不足、人間関係の不足が深刻化している。e-sport に没頭すればするほど、運動不足を促

進させ、人間関係不足を来す。「スポーツ組織は金欲しさに e-sport を取り入れている」と批判されている。ここでは、競争性ばかりでなく、身体形成性をもっと問われなければならない³⁾。私は e-sport を全面否定しているわけではない。身体活動の不足を来すような遊び方を批判しているのである。

以上のような現実から、私はスポーツの起源、本質の検討の必要性を感じた。

2. スポーツの起源—先行研究

スポーツの歴史・社会研究における研究方法論として各歴史、社会の産業、社会の発展水準に規定された身体、身体運動への要請を基底に捉える必要がある。それは人間の生存の根本に関係する事項だからである。そしてその要請はその歴史、社会における施設、用具、競争観、価値観そして生産・労働水準と社会の組織化の水準を反映してスポーツという文化として現象する。

さて、スポーツの起源については「多くの研究があるが、運動遊戯の起源は判然としない。」⁴⁾ というのが実情である。というのはそれを遡れる考古学的、歴史的資料が無いからである。画期的な『21世紀スポーツ大事典』（大修館書店、2015）においても、スポーツの概念、定義については詳細に触れているが、起源については一切記述がない。多くの論者が祭礼儀式的奉納としてのスポーツの誕生を述べる。その点では宗教起源説である。その主張のいくつかを垣間見とおこう。

2.1 宗教起源論

「生きるための条件が、人々に身体運動を強いた。」⁵⁾ これはいつの時代、社会においても言えることだが、スポーツ史研究ではしばしばこの視点が疎かにされてきた。ではその始原とはいつなのか。人間の文化であるスポーツは人類

の歴史とともに古い。しかしその誕生の起源については推定によるしかない。ここで多くの論者はその設問を避けている。しかし、J・ホイジンガは例外的に人間の文化以前に、動物から続く「遊び」にその起源を見出している。この点は後述する。

さて、原始人における論理的思考からはみ出した呪術的思考対象はハリソン⁶⁾も指摘するように「食物と子供」(同 p. 39)であり、それは「人間が季節を調節するための魔術様式の実行によって何よりもまず獲得せんと求めたものであった。これが、もし我々の考えが正しいなら、芸術の起源がここにあるとした、ある祭式の実に礎石をなしているのである。この食物に対する要求から季節祭、周期祭が生まれた。」(同 p. 40) これは芸術、呪術もまた食物という個体維持、子どもという種族維持という生物の根本的欲求に根ざしていることを意味している。彼岸の思想や神の存在などのきわめて抽象度の高い、まさに宗教として完成された形態は未だ存在していない。「宗教にしろ、道徳にしろ、科学にしろ、芸術にしろ、遊戯にしろ、スポーツにしろ、人間の精神的欲求を満たすすべての活動は、遡ればミメシス(模倣行動)に帰一」⁷⁾し、そのミメシスの源流は労働にあると、永井潔は労働起源説を採っている。スポーツも労働のミメシスとすれば、労働の何を模倣したのであろうか。

2.2 ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』

ではホイジンガの「遊び」の概念とはいかなるものであろうか。スポーツの起源だけでなく、文化全般の起源としてもその提起は重要である。引用が少し長いが、スポーツの起源論についてはほぼ彼しか触れていないのであり、その点からもしっかりと把握したい。

「遊びは文化よりも古い。…動物は人間から遊びを教えてもらうまで待っていたわけではな

い。…人類の文明は遊びの一般的概念に何ら本質的特性を付け加えなかった。動物は人間とまったく同じように遊ぶ。遊びのあらゆる基本的性格は既に動物の遊びの中に体现されている。ちょっと小犬のじゃれて遊ぶのを見れば、その喜び勇んだつかみ合いの中に、すべての遊びの特徴がまさしく認められる。」⁸⁾

遊びは動物から引き継いだものであるから、人間の作り出した文化より古いのだという。そして人間の文化は遊びから発展したものではなく、遊びそのものとして派生した。遊びは動物に本能的なものだ。もちろん人間の文化は動物からの遊びを基調にしているが、それ以上に発展したものである。つまり「人間社会に固有で偉大な活動にはすべてははじめから遊びが織り込まれている。」(同 p. 21) こうして「神話や祭祀儀式の中に文化生活の偉大な活動、例えば、法と秩序、商業と利益、詩、知識と学問などの真の起源がある。しかも、これらはすべてはまた同時に遊びの世界に根を張っている。」(同 p. 22) もちろんここには音楽、舞踊、戦争、スポーツも含まれる。ナチズムの影響下にあった1938年にオランダ・ライデン大学学長時に出版したものであり、歴史学、人類学、民俗学、神話などの幅広い知識を駆使した力作である。従来遊びは怠惰、軽佻、不真面目、非生産的、無駄あるいは子どもの無意味な行為として卑下されてきたが、人間社会・文化の基礎として学問の対象として昇華させた意義は大きい。

その遊びについてさらに次のように述べる。「現実の遊びそのものは誰の目にも明らかのように、動物界、人間界の両方にまたがって広がっている。」(同 p. 19) 「遊びはすでにその最も単純な形においてすら、また動物の生活においてすら、純生理的現象以上のもの、もしくは純生理的に規定された心理的反射作用を超えた何ものかである。このようなものとしての遊びは純生物的、あるいは単なる身体的活動の限界

を超えている。遊びは一つの意味深長な機能なのだ。」(同 pp. 15-16) ここまで来ればもう神秘主義以外の何物でも無い。さらに「人間の遊びはより高級な形式に属しており、そこでは遊びは何か意味を持つもの、もしくは何かしら高められたものであり、祝祭と式典の領域つまり聖なる領域の中にその場を見つけるのである。」(同 p. 29) ホイジンはこの強烈な「遊び」理論によってスポーツの起源については「遊戯起源論」と指摘されるが、彼自身の先の指摘に見るように動物の遊びと人間の遊びの質の差を認めつつ、得体のしれない「遊び」から発した人間の遊びは結局は宗教起源論となってゆく。

ついでに触れておけば、ホイジンは19世紀のスポーツを嘆いている。「スポーツ制度は19世紀の最後の四半世紀以来発展を重ね、遊びが次第により真面目に受け入れられていく傾向をたどった。規則はより厳重になり、一層詳しい細則が練り上げられた。達成目標はより高められた。」(同 p. 334) 「遊びの体系的組織化と訓練強化が絶えず進むにつれ、結局は純粋な遊びの内容をなす何か失われて行く。このことは専門家と素人愛好家の分離になって表れる。もはや遊びが遊びでなくなった人々、つまり高い技術を持ちながらも真の遊ぶ人の下位に甘んずるべき職業人の態度はすでに遊ぶ人のそれではない。任意性と天衣無縫のおおらかさがそこにはもう見られない。近代社会ではスポーツは次第に純粋な遊びの領域から離れていき、それ自身独自のものとしての一要素、つまり遊びでもないし真面目でもないものになってしまった。」(同 pp. 334-335) と述べ、焦点はもっぱら職業人(プロ)の批判に向けられる。しかしこの批判は文化の高度化一般を嘆くよりも当時のブルジョアジーの強調するアマチュアリズムによるプロ批判、つまり「プロのスポーツは金を稼ぐためにダーティであり、本物のスポーツではない」とするイデオロギーを無批判に、全面的に、

直接的に援用したものである⁹⁾。

さらに、こうしたプロ化は音楽や絵画などには言えないのだろうか。それらの領域ではむしろプロの高度な技術と感情が遊びをより高尚化して称賛されるが、なぜスポーツだけ否定されるのだろうか。この点でもアマチュアリズムを無批判に踏襲して偏向し、誤解したホイジンががいる。

さて、ホイジンガの遊び論は次の3点で曖昧さを持っている。

第1に、小犬のじゃれつきを例として挙げ、動物も遊ぶとしていること。現在の動物学の見解ではそれは「遊び」ではなく、幼獣の将来の狩猟行動のトレーニングであると考えられている。それは特に高等動物の肉食動物に特徴的であり、草食動物では見られない。相手の後部や腹部への位置取り、相手への甘噛み等々である。そしてこれらの行動は成獣になると消滅する。それは外敵からの攻撃に備えたり、獲物の獲得に現実に参加するためにそうしたトレーニングを卒業するからである。

第2に、動物の遊びと人間の遊びの関連について、後者は文化として発達し、スポーツも文化としてその一環である。つまり、スポーツも遊びの要素を内包した文化であるが、その起源は宗教儀式であるとする宗教起源説である。これは正しいのだろうか。

第3に、そもそもホイジンガの「遊び」は本人も述べるように「純生理的現象以上のもの、もしくは純生理的に規定された心理的反射作用を超えた何ものか」というように、得体のしれない神秘的なものであり、掴みどころのない対象であり、神秘主義である。

2.3 スポーツ把握の研究的方法論

以上ホイジンガは生物の行動を神秘的な「遊び(Play)」に求めた。さらに人間の文化は「遊び」を基盤、前提的要素とするがより高度なも

のとして、高次の発展として認識している。他の論者たちもスポーツを論じる上でホイジンガに倣って同じように「遊び」を指摘するが、スポーツの起源としては曖昧化し、結局は祭礼儀式の奉納であるとしている人が多い。中には自身の起源論の追求を曖昧にして、「スポーツは遊びだからプレイに求められる」といきなりホイジンガに依拠する人もいる。こうなると研究方法論として論外である。ホイジンガと同様に観念論的な神秘主義に陥っている。

ところで B・ジレは適切に次のように述べる。「人間が、その初期の遊戯では、自分の体力を発揮させることを好んだのはごく当然なことといわねばならない。この力によって、彼は食糧を獲得し、野獣や敵に打ち勝つことができたのである。やがて人間は、自分が示す手柄や技量に対して神々が無関心であってはならないと思った。長期にわたって、スポーツ的な鍛錬は宗教上の儀式と密接に結びついた。」¹⁰⁾ こうして狩猟、労働、戦闘がスポーツのトレーニングの始原であり、それがやがて宗教的儀式への奉納と結合したという時系列を明確に認識していた。しかし彼は始原をそれ以上に追求せず、スポーツが生命存続の根本と結合したものであることを追求しなかった。

スポーツが人類と共にあると述べるなら、人類の形成史から、その過程でのスポーツの誕生を見るのが科学的な研究方法論である。以下、この点からの追究を試みたい。

3. 「形成されつつある人類」と「スポーツ的活動」

3.1 「形成されつつある人類」

図表 1 は約600万年前に類人猿から分かれた人類の祖先アウストラロピテクス（前人）がその後「形成されつつある人類」として生存したことを示している¹¹⁾。それでも約50万年前からピテカントロプス（原人）への「第一の躍進」

中石器時代	後期旧石器時代					前期旧石器時代		
	中部旧石器時代			下部旧石器時代				
マドレーヌ	ソリユートレ	オーリニヤク	ムスチエ晩期	ムスチエ中期	ムスチエ前期	アシュール後期	アシュール前期	シエール
新 人(ホモ・サピエンス) クロマニヨン人	ネオアントロプス	最末期旧人(スクール洞窟等)	後期旧人(古典型的) (ラジャベル等)	前期旧人(進歩的) (エリングストル等)	最末期原人(シラントロプス等)	後期原人(ピテカントロプス)	前期原人(ピテカントロプスIV)	前人 アウストラロピテクス
人類社会	人類社会形成期							
形成された人類社会	形成されつつあった人類社会							
原始共同体	原始群					後期前人群	前期前人群	
人類的労働	本能的、反射的労働から人類的労働への移行期					本能的、反射的労働		
一万年 前	三万年 前				四〇万 年前	五〇万 年前		
	↑ 第二の躍進					↑ 第一の躍進		

出典：セミョーノフ『人類社会の形成（上）』法大出版局、1970年

図表 1 人間・社会の形成過程

期に本能的、反射的労働から人類的労働への飛躍を遂げ、「人類社会形成期」に入った。この時期は狩猟行動の発展と人間の心身の飛躍とに結合している。それ以前は概ね小型動物狩猟であり、約550万年も継続した。しかし「第一の躍進」期に次第に大型動物狩猟を開始した。これは道具の改善によって可能であったばかりでなく、集団行動に伴う伝達手段、言語能力の発展にも助けられた。そして大型動物の長距離追跡、運搬に伴い、体力消費の少ない直立二足歩行への完全な移行期へ入った¹²⁾。

こうした人類化の上で四足歩行から直立二足歩行への移行は身体にいかなる変化をもたらしたのだろうか。もちろん単に歩行形態の変化だけでなく、それには栄養状態の改善、脳の発達、気候条件の変化、体毛の減少と体温調節の獲得等々も大きく影響した。四足歩行は、行動範囲

の狭い小型動物の狩猟に対応した身体形態であり、「四輪駆動」ゆえに敏捷だがカロリー消費は大きく持久力は少なく、単独行動であった。一方、大型動物狩猟は簡単ではなく、時には逆襲に遭い生命の危機も伴った。獲物を数日間追跡して疲れさせて集団で仕留めなければならなかった。このことは生産力の飛躍的な向上を意味したが、人体への要請も大きかった。直立二足歩行で体力の消費を少なくし、敏捷性を犠牲にしたが持久力を獲得した。直立姿勢をとることによって獲物に対する威圧感を増し、さらに重要なことは手に道具、武器を所持し、操作できるようになり、攻撃力、防御力を増した。こうして「形成されつつある人類」は前人から原人へと約550万年かけてカロリー消費は少ない直立二足歩行という身体を形成した。

そして彼らは大型動物の追跡狩猟と獲物の運搬に長距離を歩いたり走ったりした。もちろん木に登ったり、地面を掘って塊茎を掘り起こしたりした¹³⁾。数百万年以上のこうした生活は、人間が何とかエネルギーの収支のバランスを保とうと必至になってきた歴史であり、人間の体が一定以上のカロリー消費をしなければ主に大筋群の機能の低下にはじまる多くの障害、疾病を引き起こすようになった。そのために人類は常に一定以上の運動を必須とする身体になった。「数百万年にわたる自然選択は、たっぷり身体運動をして、たっぷりカルシウムを摂り、ビタミンDを摂り、タンパク質を摂らないと。骨格がしっかりと成熟しないように仕向けてきた。」(同, p. 207)つまり人間は生命維持の根幹にたっぷりな身体運動を必須とする身体を長い進化の中で創り上げてきた。もちろんそれは骨格の形成ばかりでなく、糖分の摂取と消費のバランス、繊維性食物の摂取などについても言えることである。ともあれ、「人間は身体(運動:内海)を使うように進化した」(同, p. 289)。

この第1の躍進以降は同時に火を使用することを可能にさせた。焼くことによってこれまで不可能であった動植物を食し、食域、栄養を拡大した。多少の保存も可能となった。高質なタンパク質の摂取は脳や身体の発達にも貢献した。火は暖房手段となり、攻撃・防衛手段ともなった。仕留められた大型動物の皮は人間の衣類としても活用され、身体の保護・暖房に活用された。人類は環境を変革しながら、自らの生存条件をより快適に作り変えた。これらの変化は以前にはなかった大きな変化を身体にもたらした。

人間は生命体として先ず生きることは最優先であり、諸活動の前提である。遊びや文化を享受することは人間の基本的な営みであるが、とはいえ、一つの生命体として根底に生存、健康への身体活動が必須である。前人、原人共に植物の採取、小動物、大型動物の狩猟(そして時には戦闘)が最も基底的な活動である。特に原人への過程の大型動物狩猟では危険を回避し、同時に効率的な狩猟のために、動物の習性(弱点、攻撃性)を知り、集団的な攻撃が求められた。それゆえ、この狩猟と戦闘のトレーニング化は必要な行為となっていった。

3.2 スポーツ的活動

トレーニング化といっても当初は高度なものでなく、幼獣のじゃれつきのレベルのものであった。それから幼児のごっこ遊びのような若干のルールの共通認識のレベルへの発展には約550万年の時間を要したのであろう。これを可能にしたのは並行していた脳の認識能力の発達である。当初の狩猟労働と余暇としてのトレーニングの関係は明確に区分されたものではなく、相互に曖昧なものであった。

この時期、自然界の脅威に対する畏怖、尊敬に始まる自然神や家族、仲間の埋葬の観念などの宗教的思考も同時に芽生え始めていた。この

トレーニング化がその後スポーツへと発展する萌芽、原点である「スポーツ的活動」である。

先に永井潔の提起したスポーツにおける労働のミメシスとはこの狩猟労働と戦闘のことである。狩猟や戦闘の行為そのものの直接的なトレーニング、模倣は危険でありまた面白みに欠ける。そのため、形成されつつある未成熟な脳で危険を一定程度回避し、さらに面白さを工夫する過程が数十万年の年月を掛けて身体的競争文化として発展した。したがって、「スポーツ的活動」は狩猟や戦闘行為そのものではなく、それらの危険性を一定程度緩和して、さらに面白さを加味した新たな文化である。この点で私は永井潔と同様に労働起源説を採っている。

ところで、芸術領域では宗教起源論が強かった。とはいえ、人間の宗教心は自然への脅威、畏怖あるいは自然現象の模倣であるアニミズム、トーテミズムに始まるといわれるがその起源論は定式化されてはいないのである¹⁴⁾。

以上、人間の、生物の生存の根源に触れない宗教起源論、そしてホイジンガの「遊び」論の神秘性、観念性も表層的である。人間のその後の発展段階での祭祀儀式的奉納との指摘は間違いではないが、あくまでもスポーツの普及手段とすべきであり、スポーツの起源論としては不適切である¹⁵⁾。

人類は550万年の形成過程で「スポーツ的活動」を形成するようになった。そして約50万年前の「第一の躍進」期の大型動物狩猟化への発展期、脳も大きく発達し、次第に素朴な自然神の信仰も持つようになった。このような中で狩猟能力、戦闘能力の向上はより必須な課題となった。彼らはやがてネアンデルタール人（旧人）となり、「形成されつつある人類（社会）」の完成期を迎えつつあった。それに伴い、スポーツ的活動はより洗練されたものとなっていった。そして人類の形成過程における活動は、日常生活、狩猟活動、そして時々の戦闘の3点

から構成されるようになった。

日常生活は衣食住を意味し生存の諸活動である。ここでの大筋群を活用した活動が多少はあるが、それは鍛錬を意図したものではない。また運動を意図しない諸文化活動（例えば競争性を楽しむゲーム類）、採集活動もここに入る。もちろん小筋群の活動によるものである。小筋群と大筋群の活動の差は明確に区別される。

狩猟活動において、人間はより高い生産性を求めて小型動物狩猟から大型動物狩猟を目指した。それによって人間の新たな能力が発達した。既述のように小型動物は敏捷だが行動範囲が狭い。それらを捕獲するうえで人間は未だ四足歩行の機能を残存させていた。そしてこの段階では未だ樹上生活も行っていたから上腕も長かった。しかし大型動物狩猟は容易には捕獲し得ないし、場合によっては逆襲に遭うこともあるからまず動物の特性、弱点を把握しなければならぬ。そして集団で立ち向かううえでは戦術が求められ、人間同士のコミュニケーション能力（言語他）の発達を伴った。さらに長時間、長距離の追跡狩猟である。こうして集団の戦術、連携が問われた。大きな獲物を長距離、長時間運ぶには直立二足歩行が必要だった。これは直立二足歩行の体形・機能の発達を求めた。特に多種の大型動物を狩猟するには強い筋肉、技術を要する。そのために狩猟活動のトレーニング化は必須となった。

戦闘は種族の安全上、攻撃面においても防衛面においても不可避であった。当時の生産力水準では常に食糧危機を抱えていたから近隣の種族からの略奪行為は頻繁であった。また種族保存の上から近親相姦を回避し、健全な子孫を産むためにも他の種族を襲撃して女性を略奪することは頻繁に起きていた。食糧の不十分の中で、さらに幼児の致死率の高かった当時、近親相姦を避けた女性の獲得、略奪は必須の行動でもあった。こうして一定の能力のある者が戦闘の

準備をする事は必須だった。人間同士の生死を掛けた戦いであるから体力、技術、戦術などがすべて問われる。戦闘行為のトレーニング化（スポーツ的活動）も必須となった。

4. 形成された人類：退化の発生

そして約5～3万年（20万年との説もある）¹⁶⁾前に、人間的労働によって「形成された人類」、現生人類が誕生した。この時期人類の身体は「異常な速度」の発達を遂げ、人類は生物学的な進化を止めた¹⁷⁾。肉体の進化は事実上停滞し、文化の進歩が器官の進歩にとって代わり¹⁸⁾、「ホモ・サピエンスは生物学的な進化を続ける条件を捨ててしまった。」¹⁹⁾しかしリーパーマンによれば、生物学的進化は決して終わったわけではなく、この時期以降に急速に発達した脳の発達によって人類は文化的発展を遂げ、その文化への進化に迫られていると捉える。そして文化的進化が遂げられない場合、ディスエボリューションを起こしミスマッチ病を起こしている²⁰⁾。

人間は、日常生活、狩猟労働、戦闘での最低限のカロリーを必須とする。もちろん日常生活でも忙しくしていたり、狩猟や戦闘に従事した場合は、大筋群を多く運動させてより多くのカロリーを必要とする。こうして人間は600万年の形成過程の中で、平均的なカロリーを摂取し消費してきた。それは大筋群、小筋群や内臓諸器官の退化を防ぐ上からも必須である。つまり、毎日最低一定量のカロリーを摂取し消費して、筋肉を鍛えなければならない。体格や年齢によって異なるが、平均的な成人の場合例えば2,500 Kcalの摂取と消費のバランスが形成されてきた。もし摂取がこれに到達しなければそれは「欠乏」であるし、もし摂取がそれだけあってもそれ以上の消費がなければそれは「過食」「飽食」の状態となる。欠乏にせよ飽食にせよ、それは人間の生存にとって危機をもたらすもの

となった。野生動物は過食はしないが、人間の場合カロリーを体内に蓄積する体質を形成したから他の哺乳類と比較しても体脂肪率は高い。また、心理面から過食を行うこともある。それは同時に運動不足を伴いがちであり、肥満化をもたらす退化の要因ともなる。人類は確かに生物学的進化ではなく、新たに形成された文化的進化が重要な課題となった。特に近年では肥満、2型糖尿病や運動不足は文化的変化に適応できていない、つまり進化出来ていない典型的な事例である²¹⁾。

原始共同体の平等社会では、種族内の特定集団の欠乏と飽食は生じにくいだが、古代奴隷制社会以降の階級社会では被支配階級は長時間の重労働によってカロリーの大量消費をする一方で、乏しい食料摂取という「少量摂取・大量消費」（欠乏）の時代、生命の危機を過ごしてきた。一方、支配階級は直接的な肉体労働からは外れ、むしろ「大量摂取・少量消費」（飽食）を経験した。それゆえ彼らは退化の危機を感じ、所有する余暇を活用して、スポーツを享受したのである。労働（時には戦闘）によって一定の体力が消費されなければ、人間は別の形態でそれを達成しなければならない。ここに運動欲求の根本的な理由がある。既述のように人間の運動欲求は本能として生命維持の根本を支えるが、それが表出するのは、その時代、社会の要請を反映する形での文化形式を伴う。これがスポーツ要求の根本である。人間の身体運動要求は生命活動の維持に不可避な課題として、歴史貫通的に一貫している。しかし時代背景や社会背景の違いによって、その表現のされ方は異なる。それはスポーツの歴史を見ることによって証明される。

新人（クロマニヨン人）の誕生は約5～3万年前の「形成されつつある人類（社会）」から「形成された人類（社会）」への「第二の躍進」によって生まれたものであり、現生人類の成立

である。そしてそれは身体形質の飛躍的な進化であった。これ以降、その労働・戦闘能力の向上、健康維持、そして退化の防止のために自らの意志で意図的に身体を形成しなければならなくなった。そのため、これまでのスポーツ的活動を完全なスポーツとして完成して行った。つまり、そこに競争性を加味し、さらに面白さや興奮度を高める工夫を加えたのである。もちろん種目としては競走、槍投げ、水泳、レスリング、ボクシングなど狩猟や戦闘から派生した種目を中心であった。こうした種目はその後余暇活動の一環として、さらに宗教儀式において大いに享受されたのである。

5. 遊戯性と遊戯

人類の形成過程における身体上の最大の変化は既述のように四足歩行から直立二足歩行への移行であった。これは手による労働の道具、武器使用による攻撃・防御の向上、そして脳の発達と言語の獲得そして火の使用も併行した。この発展はスポーツを遊戯という視点から見た場合、いかなる変化、発展を遂げたのであろうか。

5.1 適応＝進化＝快適性（遊戯性）の追求

生物の生命活動は摂取と排泄という個体維持と生殖という種族維持を基本とする。生物は生息する環境への適応が求められる。この適応は生物主体にとって身体の形態や機能を変換（進化）することが求められる。適応できない生物、つまり進化できない生物は死滅、絶滅する。長い生物史の中で沢山の生物が絶滅した。そして近年も人間の環境破壊によって多くの生物が絶滅の危機に瀕している。

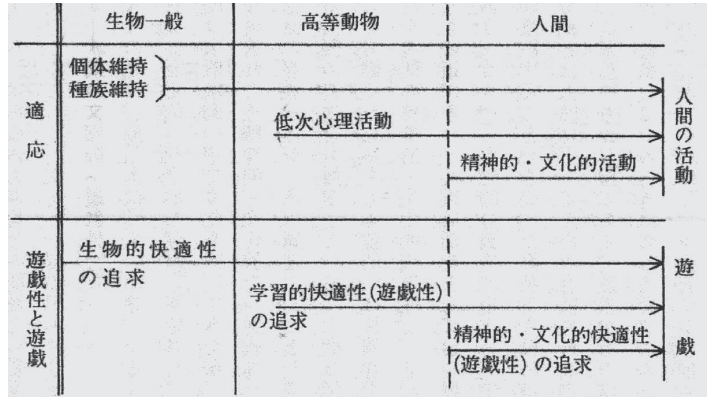
この適応＝進化を別に表現すれば「快適性の追求」と言えるであろう。つまり生物の身体にとって生存とはよりよい快適性を求めての行動である。これは原初的生物から始まって、高等動物から人類まで生命維持の根幹として一貫し

ている。つまり、人類は後で見るように高次神経活動をするが、生命の基底でこの身体的快適性の追求に規定されている。図表2に見るように、その後の高等動物の低次心理活動から人間の、精神的・文化的活動まで発展する。いかなる文化活動を行おうとも、その根底にはこの適応活動が働いている。これは日常の健康な毎日では意識されないが、病気になれば即刻意識されることである。

5.2 「遊戯」の成立

図表2の下段は、快適性を遊戯性に発展させたものである。高等動物の適応活動、快適性追求の活動には低次心理活動を含むことから、「遊戯性」と読み替えることができる。その点で生物一般の快適性は「遊戯性」といわないことにする。この点はホイジンガと異なる。彼は生物一般の生存の行動をも「遊び (Play)」で括ったところに観念性と神秘性を帯びてしまった。

高等動物では低次心理活動を行い一定の学習行動も行う。また、肉食動物の幼獣におけるじゃれつきなどの狩猟活動のトレーニングもこの学習的遊戯性に含まれる。とはいえ愛くるしい動作は人間への癒し効果も高く、高等動物も人間と同等の遊びと理解されてきた。ホイジンガもこの魔術に嵌まったのである。野生のライオンは動物園で飼育されているものに比べてより早く「遊び」を止めて、自然界の生存闘争（獲物の獲得、種の防衛）へと参入する。動物の「遊び」とは人間の高次神経活動を通しての遊びとは同等ではなく、確かに彼らの戯れを見ると、甘噛みや背後に回る動作が多く、将来の狩猟活動のトレーニングであることが明瞭である。しかもそれは肉食動物に特有の行動である。以上の点から、高等動物の快適性の追求は低次心理活動が絡んでおり、学習的快適性（遊戯性）の追求といえるであろう。そして人間の文化活動は完全に意図的で精神的・文化的快適性の追



出典：内海和雄『スポーツの公共性と主体形成』1989年，p. 172を一部変更

図表2 適応・遊戯性・遊戯

求としての高次神経活動であり，まさに遊戯の追求である。

こうして生物一般の快適性，高等動物の低次心理活動による学習的遊戯性，そして人間の精神的・文化的遊戯性の構造的に結合されたものが人間の「遊戯」なのである。つまり人間の遊戯とは単に精神的・文化的遊戯性だけで成り立っているのではなく，前二者を基盤として内包した総合性を示している。

人間の子どもは外遊びを通して体を発達させ，人間関係を学ぶ。余暇を活用して大人も遊ぶ。それは単にスポーツだけでなく，競争的ゲームであったり，諸種の社交のように，広く遊ぶのである。スポーツのように大人の文化を子どもに降ろすことも行う。

6. スポーツはなぜ，面白いのか，快適なのか

それは楽しむ人の好き嫌いという主観的な気持ちによるのではなく，スポーツとして歴史的に形成されてきた特性に依拠しているからである。それはこれまでの展開で述べてきたように，

①身体的快適性の追求であり，根底に生命活動の維持，健康の維持に結びついている。大筋群を強く緊張させ，その代謝を高め，発汗する。

時には苦しさを乗り越えた身体的な充実感，清々しさの根底にはこの身体的快適性がある。

②学習的快適性の追求である。身体的活動が十分な表現様式を未だ持ち得ない段階，つまり幼獣のじゃれつきや幼児のいろいろな甘えの行動である。これが上達すると技術上達の達成感につながる。自己の成長感を得られること，他者との協力，競争を楽しむ。

③精神的・文化的快適性である。狩猟や戦闘のトレーニングは競争を中心とする面白さが加味されてルール化される。社会の発展に伴う労働形態の変化，時には戦闘行為の形態の変化に対応して先の身体的要求の表現の様式が決定される。スポーツであるから，ルールによって決定されるが，それには競争の様式，場所・施設，行動様式，禁止事項などが規定される。そのルールは競争をより楽しくさせるように長年の工夫と改善を経て形成されたものである。

スポーツを行うことによる楽しさ，清々しさは以上の諸要素が総合されて形成されたものであり，決して単一の要因，例えば精神的・文化的快適性の心理的要因によってのみもたらされるものではない。この点がホイジンガらの遊戯論，宗教起源論とも異なり，また非身体活動的ゲームとの差異である。

7. スポーツ要請の歴史 (素描)

以上、スポーツの起源について、ホイジンガの遊戯論と宗教起源説について検討したが、ここでは人類の身体、身体運動への要請が曖昧化していた。それに対して人類の形成史における直立二足歩行化は生存として、さらに狩猟や戦闘などの身体、身体運動が存在した。これを私は労働起源説とした。人類はいつの時代も、いつの社会も身体、身体運動への願いは薄れることはない。特に時代を遡れば不十分な食糧、快適とは言えない住環境、そして過酷な労働（特に被支配階級）の下で生存、健康への願望は強かった。未発達な医療の下で諸種の疾病に罹患することは死に直結したから、加持祈祷に頼るしかなかった。種族の未来を決定づける安全な出産と子どもの健康も悲願であった。これは現在においても、そして将来においても同様である。そうした中で身体運動が人間にとって必須であることは経験上理解できたことである。とはいえ、身体運動は時代の生産活動と社会関係を反映した行動の仕方を採らなければならなかった。それはその社会の生産活動と社会関係を反映した競争、施設・用具他の要素を加味して具現化された。こうしてスポーツ的活動が形成され次第にスポーツへと飛躍した。こうしたスポーツだからこそスポーツをしたいという要求は単に身体面からだけでなく、スポーツが持つ競争性、技術習得の楽しさ、友人を形成する嬉しさ等の面からも支えられた。したがって、スポーツ史は産業の発展水準、社会の富の分配状態、労働状態、医療水準などが人々のスポーツ要求の背景として総合的に描かれなければならない。さらに、スポーツは労働起源説であり労働から派生したが、労働の直接的反映ではない。既述のように労働がモディファイされ、より興味深い競争文化として精練されたものである。それが余暇の一環として享受されるように

なった。ということは、特に階級社会では余暇の所有は階級的であり、支配階級が独占したが、スポーツもまた支配階級に独占されてきた。こうした余暇の所有もスポーツ論の前提に不可避である。しかし、これまでのスポーツ史は宗教起源論などに規定されて、身体、身体運動要請の側面ばかりでなくこうした余暇の所有構造も疎かにされてきた。スポーツの歴史はスポーツ種目の詳細やその普及状況などを記述すれば、膨大な量となる。それはそれで重要な課題であるが、ここでは今見てきた歴史的視点、つまりこれまでのスポーツ史では重視されてこなかったスポーツを必須とする各時代、社会の身体的要請という視点に絞ってスポーツとの関連を試論的に素描してみたい。

7.1 原始共同体：スポーツの誕生

約5～3万年前以降は完成された人間・社会であり、それ以前の「スポーツ的活動」を基盤にスポーツが誕生した。その種目を見ると狩猟の延長である諸競走、槍投げ、幅跳びなどの陸上競技や戦闘行為であるボクシング、レスリングなどであり、共同体の能力を有する者はすべて参加し、教育を受けた。この点で、スポーツはその誕生から公共性を持った。部族の宗教儀式には生存・健康、生活の安寧、収穫・豊穡を祈願して奉納された。

7.2 古代奴隷制社会：スポーツ競技会の誕生

一部の支配階級による生産手段や生産物の専有と、圧倒的多数であり直接的生産者である被支配階級（奴隷）の存在が古代奴隷制社会である。例えば古代ギリシャやローマの政治・文化そして余暇はもっぱら前者の所有であり、スポーツも同様であった。

古代エジプトではスポーツは享受されたがスポーツ競技会は存在しなかった。古代ギリシャの諸都市国家（ポリス）はエジプトへの出稼ぎ

者（兵士、労務者）が多く、彼らは高度な技術、文化を持ち帰った。またクレタ文明からの運動競技やダンスなども受け継いだ。都市国家の対立状況が常態化する中、近隣諸国からの侵略の危機を抱えていた。これを回避するために地中海のギリシャ地域の統合を図らねばならなかった。その一環がオリンピックをはじめとするスポーツ競技会であった。地中海地方には年間100近い競技会があった。これらは国家行事、公共事であり、各神々に捧げられた。

特に古代ギリシャにおいても「気晴らしや肉体維持」のために身体活動を行った。「これを必要としたのは生産労働から離れた貴族階級」であり、教育においても身体の鍛錬と管理が大変重要視された²²⁾。古代オリンピックでの種目は原始共同体のスポーツの延長であり、オリンポスの神々への奉納として4年に一度それらが一堂に会した競技会が組織化された。宗教儀式は初日に終わり、後は競技が行われた。こうして古代奴隷制社会でスポーツの諸種目が統合されて「スポーツ競技会」が誕生した。これは社会の組織化の発展を意味する。戦闘行為の準備、予行演習も兼ね、それによる精神の修練も兼ねたスポーツが重視された。スポーツで鍛えられた身体は貴族たちの教養の一環であり、政治や文学の素養と同等な位置を占めた。当時、貴族たちも戦闘時には先頭に立ったからである。選手はポリスのナショナリズムを背負い各ポリスを代表した。次第にプロ化し、優勝者にはポリスから金品、特権などの褒美が与えられた。参加者はすべてギリシャ民族の自由民（貴族、近辺の諸国への移住者（Diaspora）も含む）に限られ、人口の大半を占めた奴隷（被征服者）は排除された。スポーツは支配層の特権（特別な権利）であり、その範囲での公共性を持った。

7.3 封建制社会：スポーツ競技会の消失

西欧における一神教としてのキリスト教は

「精神優位・身体劣位」の理念を持ち、身体文化であるスポーツとその競技会を否定した。オリンピックはギリシャ多神教への奉納であったから異教文化として紀元394年に約1200年余りの歴史を閉じられた。

中世は生産力も停滞し、医療も古代ギリシャ以降あまり進歩していなかった。さらにネズミを媒介とするペストの流行は中世の世界を震撼させた。それゆえ、人々の生命、健康への関心は強いものがあり、加持祈祷も普及した。特に国境の接するヨーロッパ大陸諸国では日常が野蛮で不穏な社会であり、常に戦闘や近隣のトラブルに巻き込まれる危険性を孕んでいた。それゆえ、住民のすべてが、その階級、階層を問わずに常に戦闘行為、運動遊戯を行い、それらの危険に準備していた。それが、すべて階層に何らかの民俗的ゲームが普及した背景である。とはいえ、封建制社会では階級によって身体活動の種類に違いがあった。支配階級は主に剣、棍棒、槍が、被支配階級は弓、大弓、薙刀、矛槍、猪槍などであった²³⁾。後者の場合、余暇も十分でなかったから恒常的に行ったわけではなく、間欠的であった。いずれの階級においても家父長制の下で女性はそれらの社会的行動には参加できなかった。子どもや老人の地位も低かった。さらに障害者の人権が曖昧であった。ともあれ、「精神優位・肉体劣位」のキリスト教下において、スポーツのみならず集会的、奉納的な競技会は消失した。しかし資本主義の胎動を始めた1500年代あたりからキリスト教の身体への評価が少し変わり始め、農奴たちも時折、身体的民俗ゲームを楽しみ、戦闘の準備をするように奨励された。

8. 資本主義はなぜ、全国民にスポーツを普及させるのか

8.1 資本主義社会

封建制社会における宗教的世界、経済の相対

的停滞から生産力が上昇するにつれ、それまでの各戸別生産体制から次第に工場制手工業（マニファクチュア）へと発展し、資本家は少しずつ資本を蓄積しつつ資本主義化が進行した。資本主義は所有者である資本家階級（支配階級）と彼らに雇用され自らの身体だけが資本である労働者階級（被支配階級）とに分離する。

近代の国民国家にとって労働者と兵士の育成は国策となり、近代公教育（義務教育）を誕生させ基礎教養（知徳体）を育成するようになった。つまり国語の統一によって国家の意思を貫徹し、国家への忠誠心としての道徳を強化し、子どもの健康改善と将来の労働者や兵士としての身体育成である。こうして、新たな生産・社会背景がすべての国民に身体運動、体操・スポーツをするよう規定するが、学校教育以外では余暇の所有、福祉政策のあり方によって、スポーツの普及の仕方は階級的（ブルジョアジー、労働者階級）、階層的（女性、子ども、高齢者、障害者）な違いとなる。

8.2 マニファクチュア期（工場制手工業）

封建制の停滞的な農業経済から次第に手工業が発達し、工場制を採ることによって、生産性は一段と増加した。それに伴って、流通機構も発達し始め、地域の流動化はいろいろと地域不安定をもたらした。これに対して貴族はノーブレス・オブリッジ（高位の者が低位の者への福祉をもたらすことを美德とすること）から、地域の労働者、農民を含む人々に恩恵を与え、地域の安定を意図した。これらは地域の人々にとって生存・健康維持、労働力の維持と同時に精神的な安定をもたらした。当時の西欧における古代ギリシャ回帰の思想を反映して、そうした競技会は「オリンピック」と呼称されたが、古代のそのように神々への奉納という宗教性は無かった。しかし近代的なチームスポーツは未だ誕生しておらず、土着の民俗的ゲームを中

心に享受された。その先鞭が、1612年の Dover^マ Olimpick 他の「オリンピック」の開催である²⁴⁾。歴史に残った大会ばかりでなく、多くの地域で小さな大会が誕生したと推測される。

8.3 産業革命（工場制機械工業）

19世紀のイギリスは生産工程の「分業と協業」が大いに発達した。それを可能にしたのは紡績機、石炭を原料とする蒸気機関、それに依拠した鉄道網の発展等などは社会組織の「分業と協業」をももたらした。これが産業革命である。生産、流通の高度化はイギリスを世界の工場、世界の輸出国に押し上げた。そうした力を背景にイギリスは大英帝国を形成し、世界の1/5を植民地化した。

新興の産業資本家（ブルジョアジー）や伝統的な貴族の子弟の通う新旧のパブリックスクールでは、その暴力性から社会的に排除されつつあった民俗フットボールをよりマイルドに、さらに「分業と協業」に対応する身体運動としてのチームスポーツ（ラグビー、サッカー）を創出した。また、それは大英帝国の要請するリーダーシップやナショナリズム養成の重要な場となった。それらのチームスポーツは当時の資本主義の身体的、精神的、イデオロギー的要請に応えるものであり、それを基盤に個人の役割を明確にしつつ集団的な戦術を追求する面白さが、生徒たちばかりでなく、その後オックスブリッジ他の大学生に、そしてやがてそれらの卒業生を通して地域に普及していった²⁵⁾。（逆に見れば、原始共同体から封建制社会においては、高度な「分業と協業」は存在しなかったから、スポーツの形態においてもチームスポーツの存在基盤がなかった。）チームスポーツの特性として、技術習得、戦術のトレーニング、チームワークの育成などのために、資本主義に特有なクラブ制度が発足した。一方、後進の資本主義国であるドイツ、デンマーク、スウェーデンで

は労働、軍事行動の分析と解剖学との接点からそれぞれの体操を創案した²⁶⁾。とはいえ、資本主義は階級と階層によってスポーツへ接近できた時期と背景が異なる。この点を概観する。

8.3.1 ブルジョアジー

産業革命期、大英帝国時のブルジョアジーの運動欲求は、既述のように子弟の通うパブリックスクールの教育改革、スポーツ改革に具現化された。彼らは排他的なスポーツクラブという近代制度を誕生させ、アマチュアリズムによって労働者階級を排除してスポーツを独占した。諸種の国内スポーツ連盟を結成し、続いて国際連盟も結成され、「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」が世界に普及していった。

8.3.2 ブルジョア女性のスポーツ参加²⁷⁾

当初は禁止されて来た女性のスポーツ参加は、イギリスにおける19世紀後半のブルジョアジーの子どもの教育拡大に伴い、徐々に参加が増えた。1890年代には女子の体育教師養成課程も発足した。1880年代以降に爆発的に普及した自転車女性が女性解放にとって大きな役割を果たした。男尊女卑の家父長制が未だに強い中だが、大英帝国を支える存在として、女性の健康も必須となった。特に20世紀に入ると、帝国主義戦争、世界戦争の危機から、国民の兵力、労働力としての要請は女性にも及んだ。特に戦間期は各国ともに徴兵制やナショナリズム高揚、国家の求心性の必要から福祉を提供し、国民の権利要求に一定の前進を見せた。特にフランスをはじめとする大陸の女性スポーツ運動はオリンピックへの正式参加を目指し、1920年代には女性オリンピックを開催した。労働者階級の女性のスポーツ参加は、労働者スポーツ運動の中で多少の実現を見たが、労働者階級内にも女性差別は残存した。主要には戦後のスポーツ・フォー・オール政策を待たなければならなかった。

8.3.3 労働者階級

労使間の契約は自由契約であるが、労働者の

権利は実質的には無く、資本家は労働者を長時間労働、低賃金で極限まで搾取した。「工場制機械工業」生産の真っ只中において、重労働、低賃金による栄養不足、劣悪な住環境などによって労働者階級こそ生存・健康維持の身体運動を必要としていたが、長時間労働による余暇の不在、アマチュアリズムによる排除によってスポーツへの参加は排除されてきた。

労働での矛盾が激化するに従い、1860年代以降は労働者たちは労働組合を組織し、資本家に対峙して自らの諸要求を獲得するようになった。1880年代以降イギリス都市部ではエンターテイメント産業が急速に普及するのに伴い、イングランド北部の工業地帯では、工場主たちが興行主となって労働者たちのサッカーやラグビーのチームを結成して、プロ球団として発足させた²⁸⁾。

戦間期にはヨーロッパ諸国の労働組合運動の一環として1920年代以降労働者スポーツ運動も高揚した。社会民主党系のLSI、ソ連共産党系のRSIなどの国際労働者スポーツ連盟も結成されて、「ブルジョアオリンピック」に対抗して、労働者オリンピックを開催した。しかし1936年の第3回労働者オリンピック（バルセロナ）がフランコ率いるファシスト軍のクーデターによって中止になって以降、ヨーロッパはヒトラー率いるドイツナチズムによって抑圧されたが、それらの経験は戦後のスポーツ・フォー・オールの中で生かされてゆくことになった。

9. 福祉国家とスポーツ・フォー・オール

第2次世界大戦は後進資本主義国のファシズムと民主主義を喧伝する先進資本主義国との戦争であった。それは一方では既存の植民地所有国に対する後進国間の帝国主義戦争でもあった。さらに植民地支配国と被支配国間の戦争でもあった。そのうえ、資本主義国と社会主義国と

の対立をも内包した。第2次世界大戦はこうした複雑な側面を擁した。戦後イギリスに始まった福祉国家への志向は、ソ連をはじめとする東欧の社会主義的福祉に対抗して西欧と北欧の資本主義諸国に普及した。戦争で疲弊していたが国民の生命、教育、住居、労働に直結した領域での福祉を重視した。そして先進諸国は1950年代中ごろから高度経済成長を遂げたが、その成果は福祉や文化への公的援助を発展させ、福祉国家の第2段階となり、国民の文化権の発展とそれを公共が保障する義務を産んだ。諸文化の公共性が一段と進んだ。

高度経済成長は生産と日常生活の機械化、省力化の大きな発展をもたらした。また国民の栄養も大きく改善された。こうして人類の栄養摂取と消費の長い歴史であった「少量摂取・大量消費」という欠乏の時代から、「大量摂取・少量消費」という飽食の時代となったが、糖尿病などの生活習慣病を激増させた。さらに医療の発達は、これまで見過ごされてきた多くの病気を精密かつ早期に発見し、高度な治療によって寿命を伸ばした。これらは医療費の増大となり、国家予算にとって重大な課題となり始めた。こうして未来社会は一層の省力化、栄養の豊富化を迎える。それは進歩であるが、その一方で退化の可能性を内包する。人類の形成過程から抱えた「退化」(ディスエボリューション?)の可能性はここでも貫徹している。これに対処するにはスポーツをはじめとする身体運動を生活の中に必須事項として確立する以外にない。この点は「スポーツ的活動」「スポーツの起源」以来の課題がより鮮明化することになると同時に、その公共的な性格が鮮明化する。

こうして国民のスポーツ参加への権利、その条件整備としての国家の義務は、国家にとっても必須な政策となった。1975年には欧州評議会(Council of Europe)が「ヨーロッパスポーツ・フォー・オール憲章」を採択して、加盟国での

国民のスポーツ普及策を提起した。スポーツはすべての人の権利であり、それを公共(国や自治体)が義務として保障することが謳われた。こうして、アマチュアリズムを国家が率先して破棄し、女性、子ども、高齢者、障害者、民族的少数者へのスポーツ普及策を採用するようになった²⁹⁾。ブルジョアジーによって独占されてきたスポーツが全国民の権利となり、その条件保障は国家の義務となった。スポーツの公共性は原始共同体での低次から高次の次元として実現した。

しかしいま、特に日本では新自由主義の中で国民の貧困化が進み、さらに福祉が市場化・営利化され、公共施策が大きく削減されている。国民の消費能力が低下し、長時間労働も進んでいる。そのため国民の多くは自らの心身の健康に不安を持っている。こうした政策はスポーツ領域をも襲い、民間営利施設を含めて公共施設も減少し、国民のスポーツ享受は低下している。ともあれ、今後の省力化社会の中で国民の運動欲求はますます強まる必然性があり、新自由主義的な政策はそれと矛盾することは必至である。

注

- 1) 内海和雄『オリンピックと平和』の第7章、不味堂出版、2012年
- 2) J・ホイジンガ(里見元一郎訳)『ホモ・ルーデンスー文化の持つ遊びの要素についての定義づけの試み―』講談社学術文庫、2018年、p. 336
- 3) 内海和雄「第6章 スポーツにおける遊戯と遊戯性」『スポーツの公共性と主体形成』不味堂出版、1989年
- 4) ジャン＝ジュールジュスラン『スポーツと遊戯の歴史』駿河台出版社、2006年、p. 8
- 5) 同前、p. 19
- 6) J・E・ハリソン『古代芸術と祭式』筑摩叢書、1964年
- 7) 永井 潔『反映と創造―芸術論への序説』新日本出版社、1981年、p. 284
- 8) 2に同じ、p. 15
- 9) 内海和雄『アマチュアリズム論』創文企画、2007年
- 10) B・ジレ『スポーツの歴史』文庫クセジュ、白水社、1952年、p. 21

- 11) ユ・イ・セミョーノフ『人類社会の形成（上下）』法大出版局，1970，71年
- 12) 渡辺 仁『ヒトはなぜ立ち上がったか—生態学的仮説と展望』東大出版会，1985年，p. 85, p. 151
- 13) D・リーバーマン『人体600万年史（下）』ハヤカワ文庫，2018年，p. 278
- 14) R・カイヨワ『遊びと人間』講談社学術文庫，1990年，p. 70。また，子どもの「遊び的スポーツ」とスポーツについては内海和雄『頑張れスポーツ少年』新日本出版社，1987年を参照。
- 15) 蔵原惟人『宗教—その起源と役割』新日本出版社，1976年，p. 30
- 16) 13に同じ，pp. 218-219
- 17) 内海和雄『スポーツの公共性と主体形成』不味堂出版，1989年，p. 40
- 18) 11の（下）の p. 319
- 19) G・チャイルド，『文明の起源』上，岩波新書，1951年，p. 52。オーバーリン，プラトーフ『生物界の弁証法』ささら書房，1965年，p. 204
- 20) 13に同じ，p. 288，因みにリーバーマンは「退化」という表現は採っていない。
- 21) 13に同じ，pp. 49-50
- 22) R・トマ『スポーツの歴史（新版）』文庫クセジュ，1993年，p. 47
- 23) 4に同じ，p. 20
- 24) 1に同じ，p. 83
- 25) 内海和雄「資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか（1/2）（2/2）」『広島経済大学 研究論集』第42巻第2号，2019年11月，pp. 1-16，第42巻第3号，2020年3月，pp. 1-17
- 26) 嘉納治五郎による柔道の改革，講道館の設立（1882）もこの趨勢の一環に入るだろう。明治期の文明開化の中で，かつて殺戮，戦闘行為であった柔術を教育の内容，手段として改善したものである。教育者として近代教育の課題を自覚したものである。
- 27) 内海和雄「資本主義はなぜ，女性にスポーツを普及させるのか」『広島経済大学 研究論集』第40巻第2号，2019年9月，pp. 1-22，内海和雄「女性スポーツの誕生」『広島経済大学 研究論集』第40巻第4号，2018年3月，pp. 1-21
- 28) 25に同じ
- 29) 内海和雄『イギリスのスポーツ・フォー・オール—福祉国家のスポーツ政策—』不味堂出版，2003年。同『日本のスポーツ・フォー・オール—未熟な福祉国家のスポーツ政策—』不味堂出版，2005年。同『スポーツと人権・福祉—「スポーツ基本法」の処方箋—』創文企画，2015年